

総合教育会議会議録

会議の名称	第4回 総合教育会議
開催日時	平成 28 年12月 27日 (水) 午後 2時 30分開会 ・ 午後 4時 00分開会
開催場所	上三川町庁舎 4階 各種委員会室
議長 (委員長・会長等) の氏名	町長 星野 光利
出席者 (委員等) の氏名・出席者数	星野光利 町長 森田良司 教育長 櫻井定一 教育長職務代理者 清水智生 教育委員 吉田由美 教育委員 関 美恵 教育委員 出席者 6名
欠席者 (委員等) の氏名・欠席者数	欠席者 0名
事務局職員等出席者の職・氏名	総務課長 田中 文雄 総務課長補佐 海老原 昌幸 生涯学習課長 星野 光弘 生涯学習課長補佐 深谷 昇 教育総務課長 枝 淑子 教育総務課主幹兼指導主事 増渕 忍 教育総務課長補佐 沖杉 孝夫
会議次第	議 事 上三川町におけるコミュニティ・スクールの在り方について その他
配布資料	

発 言 内 容

【町長】 定刻になりましたので、ただいまから第4回の上三川町総合教育会議を開催いたします。進行につきましては、会議の主催者であります私が務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

今年2回目の総合教育会議となりますが、今回は「上三川町におけるコミュニティ・スクールのあり方について」を議題といたします。文科省が進めています地域とともにある学校を目指したコミュニティ・スクールについて、上三川町における学校と地域の望ましい連携のあり方や方向性などを自由に協議していただきたいと思います。

それでは、早速議事に入らせていただきます。「コミュニティ・スクールのあり方について」ということで、事務局から説明をお願いします。

【増淵主幹兼指導主事】 座って説明をさせていただきます。現在の動向からご説明をさせていただきます。現在、教育の大きな改革が進められ、文部科学省における中央教育審議会や政府の教育再生会議等において、学校と地域のあり方についてさまざまな答申や提言がなされております。その中では、社会の動向、子供たちの教育環境を取り巻く状況としましてさまざまな問題が提言されています。

例えば人口減少の進行、グローバル化の進展、地域社会のつながりや支え合いの希薄化、貧困の深刻化、児童虐待の増加の問題や、子供たちの規範意識や社会性等が低下しているというような課題、それから、複雑化・多様化した学校の課題に対応する教職員の勤務負担の増加等、多忙化にかかわるような勤務の問題などが挙げられております。

そこで、これらの諸課題を解決するために学校と地域の連携の強化ということが求められており、今後の目指すべき基本的方向性として3つの考え方が示されているところであります。

1点目としましては、社会が総がかりで教育を実現していくということでございます。現在、子供や学校の抱える課題の解決、子供たちの豊かな成長のためには、学校、家庭、地域が連携、協働し、社会が総がかりで教育を実現していくことが不可欠であるということが言われております。

次に、地域とともにある学校づくりを一層推進していくことが求められております。これは「地域に開かれた学校」ということで、学校は取り組んでおりましたが、そこから一歩進んで地域の人々と目標を共有し、地域と一体となって子供たちを育む「地域とともに

ある学校」を目指し、その中核にコミュニティ・スクールを据え、設置推進を図っていく必要があるということでございます。

最後に3点目としまして、学校を核とした地域づくりの推進ということでございます。これは、学校を核とした地域と学校の協働の取り組みを通して、地域の人々のつながりを深めコミュニティの活性化を図る、学校を核とした地域づくりを推進していく観点が重要であるという考えでございます。

このように学校と地域のあり方の大きな見直しが求められているところでございます。そこで、地域とともにある学校づくりの一層の推進に向けて、コミュニティ・スクールを核とした地域とともにある学校づくりを目指したいと考えているところでございます。

以上で説明を終わらせていただきます。

【町長】 説明が終わりましたが、委員の皆様から意見をお伺いする前に、先進地の取組事例などがあれば、コミュニティ・スクールの成果とか、魅力とか、もう一度説明いただいてよろしいでしょうか。

【増渕主幹兼指導主事】 説明をさせていただきます。まず、コミュニティ・スクールの魅力というものでございます。例えば子供たちにとっての魅力というものをとってみれば、地域のさまざまな貴重な人材が学校に入ってくることによって、子供たちの学びが充実していく、さまざまな具体的な体験活動が行えるようになる、というようなメリットとか、それから、地域との関係が深まることによって、将来、地域を担うような人材に育っていくというものがあるのではないかと思います。

また、教職員にとってみれば、教職員は多忙と言われておりますが、ここに地域の方々の理解や人材が入ってくるということによって、教職員の教育活動の手助けをすることができるようになる。その分、子供たちに直接向き合うような時間が教職員には出てくるというメリットがあるかと思います。

また、保護者の方々や地域の方々にとってみても、学校を核としながら、さまざまな新しい出会いが生まれることによって、地域とより深い連携ができてくる。地域のネットワークの強化と言うんでしょうか、そういうものが生まれてくるのではないかなと言われております。

先進地域の視察を何地域か行いましたが、コミュニティ・スクールの成果ということが言われているものの中には、学校と地域が情報を共有することによって、同じ目標を持って地域の子供たちを育てることができるようになっていったという事例があるという話も

聞いております。

こういったコミュニティ・スクールの魅力や成果というものが言われております。

【町長】 ありがとうございます。それでは、委員の皆様からご意見を伺いたいと思います。

【教育長】 学校の教育活動を充実させるという意味では、常々、縦と横の連携が大切であるということを考えて、各学校の校長先生方などにもそのようなことをお願いしているところでございます。縦の連携といいますと、小・中の連携だけではなくて、幼稚園・保育所と小学校との連携、さらにそこから中学校という連携が考えられるかと思えます。それぞれ発達段階に応じた教育活動というのは当然あるかと思えますが、同じ方向、同じ価値観、同じベクトルで教育活動を進めていくということが大切なのではないかと思えます。小学校で営まれている教育活動と、中学校がその延長線上にあるということ、中学校の教育活動をたどっていけば小学校、小学校の教育活動をさらにたどっていけば幼稚園、保育所というようなこと。管轄は違いますけれども、そういうようなことが大切です。特に小・中の連携、幼・保・小の連携ということで研修会なども進めているところでございます。

それと同じように、横の連携を考えますと、町内にはさまざまな団体とか、あるいは組織、また、庁舎内にもさまざまな課がございます。小・中の縦の連携と同じように、地域と学校が同じ方向を向いていくというようなこと、同じビジョンを持っているというようなこと、あるいは同じ方向にベクトルを持つ。そういうことによって、地域の教育力を生かすことができ、学校教育がより充実するのではないかと考えているところでございます。

縦の連携と横の連携を進めていく上で、学校運営協議会というのは大きな役割を担っていただけるのではないかと、そんなふうにご期待しているところでございます。

皆様からもさまざまなご意見をいただけるといいかなと思っております。

【町長】 ありがとうございます。教育長から縦と横の連携というご意見がありました。委員の皆様も、地域で、学校や社会教育などの活動にご尽力されていると思います。その辺も踏まえて何か意見がありましたらお願いします。

【櫻井教育長職務代理】 地域と学校の連携ということ、いい形で持続可能な、ずっと持続していけるような連携体系をとっている地域とか、そういった先進の事例というのは何かあるんでしょうか。

【町長】 増淵主幹、何か事例がありましたらお願いします。

【増渕主幹兼指導主事】 それでは、視察地の中で1カ所、これは全国で最も先進的な事例になっているのではないかとされている、東京都の三鷹市を視察してまいりましたので、そちらのほうについてご説明をさせていただきます。

東京都の三鷹市というのは、平成18年に学校運営協議会を2校指定したというところから研究が始まっておりまして、現在は10年が経過しているという地域になっています。こちらについては、おおよそその運営の方法については、月1回ぐらいずつ協議会が開催されていて、そこに、コミュニティ・スクール委員という名称があるんですが、CS委員と呼ばれる方々が集まってまいります。運営については、学校の管理職の方々は協力するものの、ほぼ自主的な組織になっているということで、この方々が主体的になって、広報活動等についても全て行っているということをしているようでございます。

例えばどのようなことをやっているのかといたしますと、やはり学校での体験活動についてのボランティアを見つけていたりとか、あるいは、ご自身がボランティアとして体験活動を支援したりとか。それから、部活動の指導についても、やはり専門の教員がいないようなときに地域の方々の中で部活動の支援を行うような方々を学校の中に、指導者の協力として入れていく。そういうようなことを行っているということでございます。

立ち上げ当初は、やはりさまざまな苦労があったということですがけれども、教職員が異動してからも、このCS委員と呼ばれる委員の方々が学校の異動されてきた管理職の方々と連絡をとり合いながら同じ歩調で進めているということなので、地域の育てたい力というものに子供たちがちょうど合致しているような形になっているということで、ご説明をいただいた校長先生のお話では、三鷹市では、そのようなことで「あまり異動したいという人がいないんです」というようなお話などもいただいたりしまして、学校と地域がうまく連携しているような事例の1つとして挙げられているかなと考えているところです。

【町長】 よろしいでしょうか。

【櫻井教育長職務代理】 そうすると、例えば部活動の支援ということで、「支援をしたいんだけど」ということをとりあえず運営協議会に申し出て、そちらから学校に支援を出すみたいなの、そういった形でやっているんですか。

【増渕主幹兼指導主事】 具体的な人材バンクの持ち方みたいなのところまでは、実はまだお話をお伺いしてはいませんが、おそらくCS委員という方々の中にそういうものを担当している方がいらっしゃるのではないかと想像しながら、話のほうは聞いたところです。

【櫻井教育長職務代理】 ありがとうございます。

【教育長】 よろしいでしょうか。

先ほどの人材の提供ということでは、現在の上三川では、学校の地域連携教員と、コーディネーターの皆さんがいらっしゃって、そこでいろいろなご紹介などを進めているところなんです。そういう既存の組織体制と、新たな学校運営協議会の中では、それぞれのよさを生かすというような観点で調整も今後必要なのではないかと。そのように思っております。

場合によっては、すみ分けということもあるかもしれないですね、それぞれのよさを生かしていくという。

コーディネーターも兼ねていらっしゃる、清水委員さん、如何でしょうか。

【清水委員】 先ほど増淵先生がおっしゃった地域のつながりという部分に関してなんですけれども、運動会の万国旗を全部外して作り直すのに地域の方のボランティアを呼びかけるのが始まりだったんですけれども、町長ご存じのように、本郷小学校区は、南の方に3キロ、北に2.5キロぐらいの広い学区でありまして、その中に13の自治会があり、「ボランティアをお願いします」と自治会に回覧していただいているんですけれども、学区が広いせいですかね、どうしても来ていただくのは地元の自治会の方が主になってしまいます。

幅広く、平均して来ていただければ、お孫さんなんかいない方でも、今の学校はこうなんだとご理解いただけるのでいいんじゃないかと思うんですけれども、年をとると、広さというものは随分負担なのかなと思うんです。例えばみんながみんなお車を運転できる方ばかりではないと思うので、学区が広過ぎるというのも、ちょっとマイナスの部分が生じてくるのではないかなと、最近感じている部分でもあります。

ただ、常日ごろから、どのようにしたらボランティアで地域と人とのつながりができるかなということを、本郷小学校区の地域の方々に結構まめにお会いしていろいろ検討している状況ではあるんですけれども、去年始まって1年ちょっとたちますが、なかなかまとまりません。

おじいちゃん、おばあちゃんを中心にして、子供たちが接する部分をもうちょっと多く持つということと、また、授業参観でもなければ、お母さんは学校に足を踏み入れる機会がないし、運動会ぐらいしか、お父さんは学校に足を踏み入れる機会がありません。

そういうことで、例えば小学校でやっている地域の行事に本郷祭りというのがあるんですけれども、それを土曜日とか日曜日に持って行って、おじいちゃん、おばあちゃん、プ

ラス、PTA会員なんかも一緒に楽しくできれば、新しい本郷祭りを引き継いでいってくれるお父さん、お母さんも育成できるのではないかと、そんな話も2年前からあるんですけども、また今年も同じような形の実施になってしまった。そんなふうには持っていければ、もうちょっとつながりが密になるのではないかなと、考えているところでございます。

【町長】 ありがとうございます。いかがでしょうか。

【吉田委員】 私も、学校支援コーディネーターをやらせていただいて3年目になります。担当が中学校で、まず最初に感じたのが、敷居が高いというか、門を1つくぐるのが結構地域の方というのは勇気が要るんです。中学校というのは、教科担任制で授業が入っていますので、さて、そこに地域の方が入って何ができるかというのが大変悩んだ課題があります。コミュニティ・スクールを運営していくに当たっては、また地域の方が入りやすい環境になるのではないかと期待をしております。

地域の方が入っていただければ、子供たちの教育にもつながりますし、先生方も今、「学校は学校」みたいな雰囲気があったところが、最近では、地域の方をお願いしたいという意識に変化してきたのが感じられます。そういうのに地域の方もやりがいを感じて、次回、またあったらお願いしますねと言うと、また時間があたらね、なんていうお言葉をいただいたりして、すごくいいコミュニケーションがとれてきたかなとを感じる面があります。

コミュニティ・スクールにそういった地域の方が率先して入ることによって、地域の子供たちが豊かに育てることが一番の願いだと思っております。

【町長】 ありがとうございます。関委員、何かありますか。

【関委員】 新規に私たちの世代を学校に連れ込むというか、入り込んでいただくためには、親自身が感動する機会が必要かなと思います。というのは、今年の夏、流しそうめんを地域の子供30人ぐらいでやったんですけども、そのときにうちの父が竹を割ってくれて、孫の世代からしたら単なるおじいちゃんですが、ナタで竹を割っている姿を見たときに、子供たちは感動していました。単なるおじいちゃんじゃなくて、すごくいろいろなことを知っている存在として。

そういうことは、すごく生きた教育で、私も感動しました。父のそういう一面を知ってはいましたが、目の当たりにすると、「そういうことができるんだ」と。私たちはすぐネットで調べようとか、本を見ればいいと思いますが、そこで生でやってもらおうと、ほんとうにすごい知識だなと思います。そういう潜在能力を持った方が、多分、上三川町にもたくさんいると思います。竹を割るのはそんなに大したことではないと思いますが、子供のど

きからやっている能力というのはほんとうにすばらしいものです。私たちには知識でしかないものなので、ものすごく感動したのを覚えています。

30人ぐらいでやった単なる流しそうめんですけど、地域の子供たちもすごく感動していました。親が感動すれば自然と子供を引っ張ってくるのではないかなというのを自分は体感しましたので、ここはすごく大事な部分なのではないかなと思っています。以上です。

【町長】 増渕主幹から三鷹市の先進事例を、清水委員と吉田委員からコーディネーターとしての活動体験からご意見を、関委員から感動した体験についてご意見をいただきました。学校評議員という今の形から、コミュニティ・スクールに一步踏み込んでいくときに、そのような活動体験や感動をどのように活かしていけば三鷹市のような成功事例、先進事例となっていけるのかということイメージして、ご意見がございましたらお願いします。

【櫻井教育長職務代理】 まず、やれそうなことをピックアップするとか、「何ができるのか」、「何をできる人がいる」とかいう人材の発掘がとりあえず必要なかと思えます。人材が出てきてところで、地域によってやりたいことが変わっていったりするのかなと思えます。

先ほど竹を割れるおじいちゃんという、それだけで子供が感動できるというものがあれば、それが定例になるかどうか、いずれにしても、そういう機会を与えることができる人がいるということであれば、大いに活躍していただける機会ができるのではないかなと思えます。

【町長】 ありがとうございます。

【教育長】 どういうものが必要なかという、櫻井職務代理からの意見がありました。A小学校とB小学校では、また若干必要なもの、地域の実情も違うかと思えます。そのようなことをいろいろ意見交換をするのが、協議会の役割の1つではないかと思えます。

この地域にはどんないいところがあるのか、この地域の子供たちにはどんないいところがあるのか、課題はどんなところにあるのか、あるいは、学校としての課題はどんなところなのか、学校には何が必要なのか、そんなことを知っていただく、あるいは考えていただく。そして、それを実現するためにはどういう方法があるのか、どんなネットワークを生かしたらいいのか、そのようなことをこの学校運営協議会で考えていただく、協議していただくということ、それも大切なのではないのでしょうか。

組織が地域の実情を踏まえながら、学校と共に必要なものを考えていただく、そのような組織を期待しています。

【町長】 関委員、どうぞ。

【関委員】 今でもお祭りがあるんですけども、そういったお祭りでは、従来からやっていた方たちは、人手がなくなっているとか、なかなか手助けしてもらえる人材が来ないという悩みが多分あると思います。一方で、違うところで個別にやっている人たちを、例えばコミセン祭りとかでもうまくつないで、お互いのできるところの協力をもつとすると、すごく子供たちも楽しめるのかなと思います。

多分コミセン祭りをやっている方たちで、最初からやってきた方たちには、なかなか難しくなっている部分もいろいろあると思います。人脈をつないでくださるとか、例えばこの地域だけではなくて、ほかの地域の活動をお互いに知り得たりとかするというのは、すごく財産になるのではないかなと思います。

【教育長】 今、関委員が言われたように、地域のネットワークができてくるというようなこと、あるいは、それぞれの地域の皆さんも、地域を知るきっかけになったり、学校を知っていただくきっかけになったり、いろいろと可能性が出てくるのではないかと思います。

先ほど言いましたように、A小学校がやっていることを、B小学校も同じことをやる必要はないのではないかと。B小学校はB小学校なりに、C中学校はC中学校なりに考えていけばといいのかと思います。

【町長】 私は常々、町の職員にC A P D oと言っています。製造ラインなどではP D C Aと言って、P l a n、計画を立てて、D o、実行して、C h e c k、評価して、A c t i o n、その改善をする、そういうサイクルで物事を考えましょうという発想をしています。

「行政の場合は長い歴史の中で業務を継続してきているので、一番最初に現状を十分に分析する「チェック」が確実にいかないと、その後の「アクション」、「プラン」は絶対うまくいかない」と言っています。チェックを入れて、アクション、プランだからキャップ、そしてD o、それをやりましょうと。

先ほどの増淵主幹の説明にありましたように、現状に対していろいろな問題点が提起されていることから、コミュニティ・スクールを立ち上げることで地域との密着を促進し、学校運営の円滑化を図るということだと思います。委員の皆さんがお住まいの地域の学校

でも多少の差はありますが、同じような問題を抱えていると思います。

清水委員から、「近い人は集まってくれるが遠い人はなかなかあつまらない」との発言がありました。遠い人まできちんと伝わっているのかという疑問もあると思います。遠い人の中にも、「俺がやってやる」という人材はどの学校の地域にも必ずいると思います。ボランティアとして活動してくれる人にきちんと伝われば、もっともっと集まってくれるのかなと思います。運営する側や学校がそういうところを「確認し反省する」ことが大切だと思います。先ほどの「キャップ」のC・Aのところですよ。

吉田委員から「敷居が高い」というお話もありましたが、たとえば「町民から見て役場は敷居が高くなかなか来れない」というようなことがあれば、役場と町民の連携が不十分ということなので、敷居を低くして町民の皆さんが入りやすくしなければなりません。

三鷹市では、地域の人でいろいろな得意分野がある方に継続して教えてもらっているという話がありました。中学校の部活動で、学校の部活に入らないでクラブチームには入っているという生徒が結構おりますが、「学校の指導力に親が満足していない」ということもあると思います。コミュニティ・スクールがどんどん機能して、敷居が低くなるのもいいことですが、踏み込む領域を間違えてあまり踏み込まれると、先生方の指導環境を壊してしまう危険性もあると思います。コミュニティ・スクールは、地域と共にある学校を理想としていますが、行き過ぎを抑制することも、ある程度は必要になると思います。

将来、コミュニティ・スクールの立ち上げが進めば、情報交換や連携を図ることにより互いに良い方向に進むことができます。「連絡協議会」などを立ち上げるのもいいと思います。実際にコミュニティ・スクールを運営していくときには、リスクや課題がでてくるとは思います。委員の皆さんが苦勞されたことやうまくいかなかったことなども、コミュニティ・スクールの立ち上げにより良いものになっていけばいいと思います。

【櫻井教育長職務代理】 先ほどの説明にもありましたが、子ども達を取り巻く現状に問題点がたくさんあって、その問題点の解決のために地域の人をかりることが、コミュニティ・スクールを設置する理由かだと思います。多忙だった先生方に時間をつくってあげて、子供たちに目をもっともって向けていただくということなので、コミュニティ・スクールを設置することが、逆に先生の負担増になるような形にならないかという、心配もあります。

どういう形であっても、何かしら、先生方に協議会に協力していただかないといけないということになったときに、「授業を抜けてやらなくちゃいけないだよ」みたいな先生方

の負担増になることがないように、そういったシステムづくりが必要だと思います。

【教育長】 櫻井職務代理さんのご意見、非常に大切だと思います。やはり、学校の教育活動の主役は児童・生徒であり、教職員であると思います。その教育活動が円滑に、さらによりよくなるということが一番の願いであるかと思います。先ほど町長がCAPD oということで、評価をして、評価から始まるというお話をされました。学校では、教職員評価、保護者アンケートなどによる保護者評価、そして自己評価をして、そういう仕組みはしばらく前から進めているところです。

学校運営協議会は、それらの機能をより強化したり、あるいは進化したりできる組織であってほしいと、そんなところを願っているのではないかなと思います。それらがうまく回っていったときに、よりよい教育活動ができるのかなと思っております。

やはり、学校と地域が共に考えるというスタンスを大切に展開できるといいのかなと思います。同じ方向性を持って考えていくという、そういう学校運営協議会が運営できると各学校の教育活動がより充実する、そんな気がいたします。

【町長】 先ほどお話ししたように、敷居を低くしていくためには、今までよりもオープンにしていけないといけないところが当然出てまいりますし、今までよりもコミュニケーションを高めて、学校のことを理解してもらうような努力をしないと、敷居は当然低くなっていかないと思います。

ただ、櫻井職務代理がおっしゃったように、それが教職員の負担になってしまったら、かえって子供たちにとってマイナスの効果が現れてしまいます。そうならないように、オープンにさせていただくところはさせていただいて、地域の人が入り込みやすく溶け込みやすいような環境を整えて、全てが子どもたちにとってプラスになるように進めていければと思います。なおかつ、清水委員がおっしゃられたように、PTAや協力団体等にきちんと浸透して、それが実のあるものになっていければ理想型だと思います。

コミュニティ・スクールについては、委員の皆さんのご意見を踏まえて、教育総務課を中心に検討を進めていただきたいと思います。

他に何かございますか。

それでは、本日の議事はこれで終了ということにさせていただきます。

— 了 —